

特別  
レポート

新潟県中越地震から2年

# 山が動いた 住民の叫喚の中にいた

産経新聞新潟支局記者 渡部一実

震度7——04年10・23新潟県中越地震。

記者になって半年、それは最初の赴任地で自ら体験した衝撃だった……。

いつもの何でもない日常が亀裂した瞬間の光景から2年後の「いま」を、

04年中央大学法学部卒の新鋭記者がレポートする。

とにかく現場へ！

2004（平成16）年10月23日夕この日は土曜日ということもあり、新潟県庁に程近い産経新聞新潟支局はのんびりとしたムードに包まれていた。紙面作りも早めに終わり、「みんなで焼き肉でも行こうか」と話していたその時。突然、突き上げるような激しい縦揺れに見舞われた。書棚が左右に揺れ、詰め込まれた本が今にも崩れてきそう。机につかまり、立っているのがやっと。

テレビのニュース速報が流れる。「午後5時56分ごろ、新潟県中越地方を震源とする強い地震が発生しました。地震の規模を示すマグニチュードは6・8」

間髪を入れず、デスクの指示が飛んだ。「とにかく現場へ！」

ノート、カメラ、パソコン。そしてありったけの現金を鞆に詰め込み、車で現場を目指す。高速道路は当然全面通行止めだ。やむを得ず一般道を走るが、主要道路はすべて大渋滞。延々と続く車列にいらだちを覚えながら、迂回路を探して地図とにらめっこを続ける。そうこうする間にも、

カーラジオが被災地の状況を次々と伝える。「小千谷市で小学生が生き埋め」「山古志村と連絡つかず」「震度は6強」「強い余震が続く見込み」……。

午後11時すぎ、長岡市に到着。道路は波打ち、深い亀裂が入っている。停電で町は真つ暗、信号機や方向指



渡部一実記者

示器も故障。街は完全な無法地帯だ。それでもドライバーは皆、左側通行や一時停止、制限速度を守っている。「やっぱり日本人だなあ」。変などころで、人々の遵法意識に感心した。

警察の規制線をかいくぐり、裏道を走り続けること約8時間。翌午前2時、ようやく目的地の小千谷市に到着した。この日から約1カ月、電気、ガス、水道などのライフラインがすべて遮断され、ホテルの確保もままならない被災地で、悪戦苦闘の取材活動が始まった。

## ムラが消える

春には田植え、夏にはコイの水揚げ。秋になれば棚田に黄金色の稲穂が揺れ、闘牛場では勢子と呼ばれる男たちの勇ましいかけ声が響く。中越地震で一躍全国区の知名度を獲得した旧山古志村（現・長岡市）は、そんな日本の「原風景」を残した美しい村だった。そう、あの瞬間までは。

「山が動いた」

地震後、誰もがそう語った。山の斜面が崩落して茶色い地肌が剥きだ



湯沢町 長岡市に崩れ落ちそうな家屋＝いまでもいすべりでたす

「オラたちのムラが消える」

## 阪神・淡路以来の「震度7」

北魚沼郡川口町は人口わずか5000人、山間の小さな町だ。地震では、町役場に設置された震度計が破壊発生から約1週間後に正確な震度が判明した。「震度7」。阪神・淡路大震災と同レベルだ。その衝撃、恐怖がどれほどのものだったか。記者が多言を弄するよりも、住民の肉声に直に耳を傾けてほしい。取材中に知り合った同町のある女性の日記には

こう記されている。

〈……午後6時前後、大地

震第一波。以後ずっと続く。強烈なタテゆれ。着の身着のまま、避難がやっと。山は鳴り、地は叫ぶ。家中、物という物がふっ飛ばす。瀬戸物、ガラス類はすべてくだけ散り、テレビ、レンジ、釜すべて散乱。この

世の終わりか。生き地獄とはまさにこのこと。外に飛び出ても地割れ、隆起、陥没。暗いので動けない。大揺れが続き立っていられない。ゆれるたびに地面にへばりつく。悲

鳴が聞こえる。……〉(10月23日)

地震の恐怖が和らいだ後は、かけがえのない生活を失った悔しさを、無念さが徐々にこみ上げてくる。

〈お互いに会えば「がんばろうね」の声をかけあいながら歯を食いしばって耐えている。

「一人では絶対行かないように」との嚴重な注意にもかかわらず、つい（自宅に）足が向いてしまう。どうしても持ち出したいものがあるから。知人、友人の電話番号、貴重品、思い出の品物。今までの生活の証。家族や友人の写真。思わず涙がこぼれる。……〉(29日)

日記の女性は、松崎千鶴さん。当時65歳。川口町で生まれ育ち、長く小学校の教師を勤めた。数年前にご主人が亡くなり、子供たちも独立してからは自宅で一人暮らし。地震発生時もそうだった。

災害は街だけでなく、人間関係も壊す。極限状態に置かれた被災地では、全国から寄せられた食料や衣類、日用品の分配をめぐる争い、人々がエゴむき出しで争うこともあった。

日記にはこんな記述もある。

〈……救援物資の配分、地区に配

られた物の末端におけるみにくい行為が横行。早い者勝ち、強い者勝ち、恥ずかしい。みんなの心が荒廃し、腐ってきた。われ先にと焦って「もらえるものならなんでも欲しい」と目の色を変えている(11月4日)

本震後、約2週間は強い余震が続いた。そのたびに住民は皆、恐怖におののいた。

〈……11時15分。グラッ。あつ、きた！ 震度5弱。かなり慣れてきてはいるが、やっぱり怖い。(大地震は)映画やテレビの話と違って、地震の時は大きな物の下に入つて」とか、そういうことで身を守る保証はない。物が落ちたり倒れたりするところに長くどまったら、脱出できない。結局、最後は各自の判断、決断が重要になってくる(8日)

地震発生後しばらくは車中泊と避難所暮らし。自宅はそんなに被害を受けていなかったため、松崎さんは発生から2-3カ月で自宅に戻った。

松崎さんの取材は地震後丸1年続けることになった。発生から1カ月後、3カ月後、半年後、1年後の節

目に日記を提供してもらい、被災者の実感と観察が息づく貴重な記録として継続的に記事にした。

災害報道は突発的な事件や事故と違い、発生から復旧・復興まで息の長い取材が必要だ。だからこそ、日々の現象を総花的に網羅するのではなく、このようにポイントを絞った「定点観測」も大切だと思う。

### 「絶対助けるんだ」

10月27日。中越地震の一連の報道のうち、今も人々の脳裏に焼き付いているだろう歴史的なシーンがあった。長岡市妙見町の土砂崩れ現場で、母、姉とともに乗用車ごと生き埋めになっていた皆川優太ちゃん(当時2つ)が救出されたのだ。

「ワン！ワン！」。同日午後1時ごろ。救助犬が優太ちゃんの生存を知らせるように吠えた。同時に、電磁式の生命探索装置が車内にいる人の心音をキャッチ。ここから奇跡の救出劇が幕を開けた。

東京消防庁の消防救助機動隊(ハイパーレスキュー)の隊員が、優太ちゃんの名を呼び続ける。県道脇の崩落斜面で隊員らは慎重に土砂を取

り除き、埋もれた車体を切り裂こうとする。グラッ。不安定な足場。容赦なく余震が何度も襲いかかった。百戦錬磨の隊員たちもさすがに恐怖を感じただろう。

しばらくすると、岩間からかすかなうめき声が漏れた。「ウー」。これを隊長は聞き漏らさず、隊員に檄を飛ばした。

「ここだ。生きてるぞ！絶対助けるんだ！」

岩と車体の間にできたわずかな隙間。そこに優太ちゃんは立っていた。顔は土色、服も真っ黒、ズボンは脱げて裸足。隊員は冷え切った幼い体を宝物のように抱きかかえ、耳元でささやく。「よく4日間も頑張ったな。それに答えるように、優太ちゃんの手は、隊員のたくましい腕をギュッと握って離さなかった。

「奇跡だ」。地震発生から92時間後の救出劇に、テレビの前の被災者たちも泣いていた。

「お母さんとお姉ちゃんの分も、強く生きてね」。そういつて言葉を決まらせる人もいた。

皆川優太ちゃんの奇跡的な救出。それは、地震発生以来、恐怖と絶望

に打ちひしがれていた被災者が、復興に向け一筋の光明を見いだした瞬間だった。

### 「角さんがいれば……」

被災地のうち南魚沼郡、小千谷市、旧山古志村などは、衆院の選挙区でいうと旧新潟3区。言わずと知れた田中角栄元首相のお膝元だ。この地域には、山間の村から平場に出るための隧道が無数にあり、道路整備や河川改修、砂防工事も行き届いている。これは「利権誘導政治」と批判された元首相の「豪腕」で実現したもので、住民の角栄信仰はいまだに根強い。「都会もんにはいくら言っても分からんて。この集落は昔、雪が降ると一歩も外に出られず、急病人はみな死んだ。でも、トンネルのおかげで、病院に運べるようになった。角さんは命の恩人だて」。何度こんな話を耳にしたことだろう。

中越地震では、小千谷市から山古志村へ続く国道291号が崩壊。地元で「角さんのトンネル」と呼ばれる塩谷トンネルも壊れ、元首相の胸像にもヒビが入った。「今太閤」「闇将軍」と呼ばれ、権勢を誇った元

首相の「神話」が次々と壊れてゆく……。

利権誘導や派閥均衡人事、企業ぐるみ選挙などの「角栄型政治」が、小泉改革によって否定されつつある。昨今、元首相のお膝元を破壊したこの震災はまさに、一時代の終焉を暗示するかのようだった。

だが、住民は本能的に知っている。被災地の復旧には莫大な資金が必要で、国や県からの予算措置は地元代



倒壊した家屋＝小千谷市

議士の政治力にほぼ比例する。きれいな事ではない。生活がかかっている。だからこそ皆、口を揃えてこう呟くのだ。「今、角さんが生きてればなあ」

### 仮設住宅の暮らし

05年1月、体験取材と称して山古志村の老夫婦が住む長岡市陽光台の仮設住宅に一泊させてもらった。

間取りは2DK。四畳半の和室が二間にダイニングキッチン、風呂、

トイレ。和室には収納スペースもある。冷蔵庫、電子レンジ、洗濯機などは入居時から備え付けられていたという。

「家具はほとんど買つたらん。ありがたいほど支援物資が来たて」。そう2人が言うように、押し入れには毛布や布団、衣服やタオルが山積みだ。懸念された除雪作業も、全国から駆けつけたボランティアがすべてやってくれる。欠点といえば部屋の狭さぐらいだろうか。

一泊して分かったのは、被災地にも「格差」があるということ。前述の通り、山古志

村民の仮設住宅には、全国から有り余るほどの救援物資が送られた。しかし、同じように被災した長岡市濁沢地区の住民の仮設住宅は違う。生活用品はほとんど「自腹」という。除雪ボランティアも少ない。

これは、我々の報道にも責任の一端がある。新聞で見出しが立ちやすいし、テレビでは絵になるから。こんな理由で、山古志ばかりを取りあげなかつただろうか。意図的でないにしろ、ほかの被災地を無視してこなかつたか。すべての事象を伝えることが不可能な以上、「ニュースになるもの」を選ぶのはやむを得ないが、被災者はそう受け取らない。小千谷や川口、長岡などの被災者には一時、山古志への「嫉妬」が渦巻いていた。取材中に皮肉を言われることも多く、長岡市の被災者にこう言われたこともある。「マスコミはいつもヤマコシ、ヤマコシ。世の中、有名になった者勝ちだね」。報道人の「業」を的確に突いたこの一言は、今でも胸に突き刺さっている。

### あれから2年

地震からまもなく2年。被災地が

全国的に報道されることは、もう皆無といつてよい。多くの人とつって中越地震は「そんなこともあったなあ」という感覚だろう。

たとえば奇跡の救出劇の皆川優太ちゃんは現在4歳。魚沼市内の保育園に元気に通っている。被災地の整備が進むにつれ、風景のなかに明るさや元気が戻ってきたのは事実だが、いままも生活再建を目指して人々の格闘が続いている。8月31日現在、仮設住宅で暮らす人は1877世帯6042人。仮設の入居期限は本来、今年の12月までだが、新潟県は延長する方針を決定。約800世帯が仮設住宅で3度目の冬を迎えようとしている。

新聞記者になって1年目、新潟配属からわずか半年で体験した大地震。右も左も分からない中、とにかく全力で駆け回った。家族や家を失った被災者の悲しみや、それでも前向きに生きようとするたくましさに触れる時には涙することもあった。

だからこの先も、何らかの形で中越地震に関わり続けたいと思う。最後の1人が仮設住宅を出るその日まで。